

## (宗教と科学) 般若心経を読み解く

高野山大学客員教授・京都大学名誉教授

高岡 義寛

明けましておめでとうございます。昨年は世界中の多くの人々がコロナ禍に苦しみ、不安な日常生活を送ることになりました。今年は新型コロナウイルス感染症が終息し、皆様にとって良き年でありますようにお祈り致します。

さて、小職が住持している西明寺（京都市）は、平安時代に修行道場として智泉大徳によつて開かれた山寺です。当時は神護寺の別院として開かれましたが、現在は真言宗大覚寺派の寺院であります。本山・大覚寺では平成三十年の戊戌歳に嵯峨天皇宸翰般若心経が六十年ぶりに開封されました。千二百年前の戊戌歳は疫病が蔓延し、自然災害も発生して人々を苦しめていました。嵯峨天皇は人々の不安や苦しみを抑えるために、弘法大師の勧めに従つて般若心経をご写経されました。ご存知のように、般若心経には不思議な力があります。心静かに写経を行ったり、あるいは心を空・無の状態にして唱えることによつて、煩惱や苦しみ、様々な楽しみ等によつて波立つ心を静めてくれます。そして、無明の世界が光り輝く平安の世界になると説かれています。実際に嵯峨天皇のご写経の数年後には、人々が安心して生活できる平安の世に戻つたと云われています。本稿では、こうした有難い経文である般若心経について、密教と科学の観点から読み解き致します。

般若心経は釈尊が弟子の舍利佛に説いた教えであります。二百六十二文字の短い経典ですが、その中には、諸行無常、諸法無我、涅槃寂静の三つの法印（事実）が説かれています。諸行無常の「無常」と云う言葉には「変化する」と云う概念が含まれており、「あらゆる存在（万物）は変化する」と説かれています。また、図1に示すように、変化には空間的および時間的な変化  $(\Delta V/\Delta t > 0 \text{ or } \Delta V/\Delta t < 0)$  が挙げられます。そして、万物は形と大きさを有しています。それらは空間的・時間的に変化します。また、「万物は空の中にあつて変化し、誕生  $(0 + A = A)$  と終焉  $(A - A = 0)$  を繰り返している」と説かれています。諸行無常について、方丈記の中では「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え

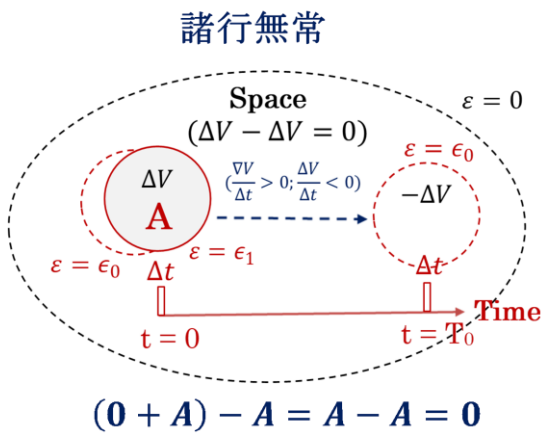


図1. 記号論理学を基礎とした諸行無常の説明図

かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。」と記されています。すなわち、「川面に浮かぶ水の泡は形や大きさを変え、消えては現れ、現れては消え、儂い無常の姿を表して川下へと流れている。」と記されています。変わらないモノに価値を置く人にとって、無常（変化すること）は儂いと感ずるのではないのでしょうか。

諸法無我は三つの法印の中で特に捉えがたく、「空」の性質が理解できないと机上の空論となってしまう概念です。空とは虚空のことで、空っぽの状態を表しています。また、空はモノが入っている器の性質であって、器の中の存在（モノ）の有無とは別の性質です。また、空っぽで何も無い空無の状態を真空（ゼロの世界）と称されています。いわゆる、真空とは時間も空間も存在しない極限の無の状態を表わしています。そして、「色即是空 空即是色」すなわち「万物は空の中にあって、空そのものである」と説かれています。また、「人（我）は空の中から生まれ、空の中に消滅する存在であって、元々は無我である」と説かれています。弘法大師は、無我について「死後に残った白骨にその人の「我」はありません。風雨にさらされた死体に「人」は存在しません。」と述べられています。なお、生・死については、「生生生暗生始 死死死冥死終」（秘蔵宝鑰）と述べられています。すなわち、「生の始め、いわゆる生のエネルギー（生命）が生じる原因は暗くて、よく分からぬ。死の終わり、いわゆる状態数が1（エントロピーがゼロ）となる生命の基本状態もよく分からない。」と考えられたのではないのでしょうか。

ところで、宇宙物理学では、宇宙には端があり、端の向こう側は真空状態、いわゆる時間や空間も存在しない極限の無の状態であると考えられています。そして、宇宙には始まりはなく、真空の中で誕生と終焉を繰り返している、いわゆるサイクリック宇宙論の考えが提唱されています。こうした考えは、図1に示すように、「存在  $\nabla$ （我）は空の中から生まれ、空の中に消滅する」ことを表した記号式「 $(0+A)-A=0$ 」で表記することができます。のではないのでしょうか。また、宇宙と我は元来、同じ性質、いわゆる諸法無我の性質を備えていることが理解できるのではないのでしょうか。このことを「梵我一如」と称して、ご存知のように、密教の根本的な教えとなっています。

原因と条件によって生じたモノは存在すると感ずることによって、人（我）の独断と偏見を取り除くことができます。科学の分野では、物事が存在できる条件や原因を明らかにしようとする研究している科学者が沢山います。般若心経では、「万物は因縁・因果の法に従う」と説かれています。そして、因縁・因果の法を見るとき、正智（正しい智慧）が生じます。正智が生じるとき、正しい生活（生命活動）が行われます。正しい生活が行われるとき、悩みや苦しみから救われ、ここに平安の光明が現れると説かれています。そして、平安の光明は心を清寂にすることによって実現すると説かれています。すなわち、経文の中で記されています「羯諦 羯諦 波羅羯諦 波羅羯諦 菩提娑婆訶」の呪文を深く心に観念し、口に誦えれば無明の闇を取り除かれ、平安の光明が現れると説かれています。このように、涅槃寂靜とは、煩惱や苦しみ等によって波立つ心が静まって空・無の状態となり、無明の世界が光り輝く平安の世界になることを表しています。

积尊がインドの靈鷲山で説いたとされる般若心経の三つの法印は、仏法として後世に伝えられ、中間派や唯識派の仏教思想に取り入れられています。そして、弘法大師は「仏法は遙か彼方の遠いところにあるのではなく、自身の心の中と云う、大変近いところにある」と述べておられます。西明寺の本堂正面の梁に、空海筆の「靈山鷲心」の文字が彫られた扁額が掲げられています。靈鷲山で瞑想している积尊の心境を表現した四文字です。まさに悟りの境地（涅槃）にあつて、静かで安らかな境地（寂静）である积尊の心境を表現しています。

南無大師遍照金剛 合掌

（注記）本稿は「高野山時報・新春合併特集号（2021年1月1日発行）pp.85-86.」に掲載された解説文である。